

姪の就職活動から見えたもの（1）

私には神戸に一人妹がいる。今年、その妹の下の娘（私にとっては姪）が大学4年生になり就職活動を行った。結果から言えば、有り難いことに希望の職の内定をいただけたのだが、その就活の面接の際に彼女が語ったという自分の中学から大学までのエピソードを私は妹から聞いて、これは塾生諸君にも何かの参考になるのではないかと思った。中でも中学での部活のエピソードは身近なものでもあり、運動のみならず全てのことに通じるものだと思ったので、手前味噌だが紹介させていただく。

中学で姪は柔道部に入部した。同期は6人。皆初心者。熱があろうが、けがしていようが、強制されたわけでもないのに全員必ず練習に来ていた。参加できなくても見学をする。理由は、“その日、新しい技を先生に教えられたら自分だけ教われなくなってしまうから。見るだけでも見ておきたい”。というもの。6人、皆仲が良く、最高の友達だったが、お互い絶対に負けたくない最高のライバル同士だった。そんな仲間と切磋琢磨した3年間。毎日、朝は朝練、夜は父親とランニング。どんなに寒い冬でも道場は暖房がなく、道着一枚で足元ははだし。おまけに食べ盛りにもかかわらず、階級に合わせて厳しい減量もしなければならなかった。姪は、「この3年間で相当精神的に鍛えられた。この先、何があろうとやっていけると思えた。」という。

そして、その3年間の集大成である3年生の夏の市大会。姪はまず個人戦に出場し、この試合に勝ったら県大会に出られるという大一番。相手は強く、開始からしばらくして有効をとられてしまった。3分間一本勝負。時間はどんどん過ぎる。相手はポイントをすでにとっているから逃げに入る。なかなか組ませてもらえない。くやしさと焦りで涙が出てくる。ラスト10秒。二人でもつれながら場外に出そうになったその時、姪は渾身の力をこめて相手に技をしかけた。今まで一度もやったことのない技。姪の両足はすでに場外に出ている。はたして相手に技はかかったが、二人して場外に転がった。「一本！」審判の声が響く。姪が技を仕掛けたとき、相手の片足が場内に残っていたのだ。時計はラスト5秒を指していた。

試合後、今まで一度もほめられたことのない監督に、「練習はうそをつかないな。」と言ってもらった。本当にうれしかった。この後の団体戦で肩甲骨を骨折しながらも勝ち、県大会にはサポーターをまいて出場するも、そこを攻められて残念ながら敗退。だが、監督の言葉とこの経験が彼女の心に深く残り、その後の高校生活も大学生活も根性と努力で乗り切ることになる。

やせっぽちだった姪。44キロの階級からのスタートだった。続きはまた来月に。